

中央審査会特別賞（優秀賞）

水と共に生きる

岩手県 陸前高田市立高田第一中学校 二年 小野寺 麻緒

あの日、私は初めて水の怖さを知った。東日本大震災が起きたのは、今から八年前。当時、私は五歳だったが、その時のことは、今でも鮮やかに覚えている。

私はあの時、中学校の体育館に避難した。避難所で一番先に配られたのは紙コップ半分の水。ほんのわずかな量であったが、嬉しかった。しかし、水は不足し、トイレの水は流れず、お風呂に入ることなんて考えられない日々であった。私は、「海なんて無くなればいい、津波なんて来なければよかったのに」と何度も思った。地震は、私たちの大切な街を、人々の笑顔を、そして、たくさんの思い出を奪っていった。私は幼いながらも本当の悲しみを感じた。

数日して私たち家族は、山沿いにある祖父母の家に避難した。そこで、私は陽の光を集めてキラキラ光る沢の水にはっとして思わず息をのんだ。私はいてもたつてもいられず、一目散に走って行き、水をすくうと一気に飲んだ。ゴクゴクと音を立て、冷たい水は私の喉を流れていった。味のしない水がこんなにもおいしいなんて思ってもみないことだった。

小学生になると、私は体育の授業が不安だった。水が怖くて、プールに入るのがとても嫌だったのだ。「おぼれたらどうしよう、沈んでしまつたらどうしよう。」といつも考えてしまっていた。けれども、プールの水面に映る輝きは、あの山の沢のきらめきにも似ていて、喉の渴きをうるおした水の記憶と重なり、私の恐怖心は徐々に薄れていった。

海が嫌いで、海なんかなくなればいいと思っていた私だったが、中学生になると次第に私の気持ちは変化し、「この海とともに生きていくためにはどうしていったらいいのだろう」と考え始めていたのだった。そんな時、父から「防災についてもっと知りたくないか」と誘われ、市で行われている『防災マイスター養成講座』に父と姉との三人で通うことになった。たくさんの大人に交じって話を聞くことは少し難しかったが、

洪水や土砂崩れなど水害の学習や避難生活の食事、地域での避難訓練の大切さなどを改めて学ぶことができた。十二講座の中でも特に、靴の代わりに新聞紙でスリッパを作ることや火を使わずに水だけで調理ができる食品のことがとても印象に残った。災害から身を守るための知識がないと、自分を守れないことも初めて知った。最後にテストを終えて、私はマイスターの認定を受けることができた。そして、その学びを同じ学年の仲間の前で発表する機会に恵まれ、避難所運営に役立つ情報を伝えることもできた。災害時に長持ちする食品や賞味期限の優先順位をつけるというローリングストックの話をみんなはとても興味深く聞いてくれて、私もみんなの役に立てたことがとても嬉しかった。

人間の命を支える水は、時として、人の命も奪ってしまう怖いものにもなる。しかし、震災を経験した私たちにとって水はかけがえのない大切なものだ。

私は、水に囲まれたこの街が好きだ。好きだからこそ、海を怖がらず、水を怖がらず、次の世代にもこの街を好きになってほしいと願う。どんなに月日が過ぎても震災の悲しさや辛さは決して消えることはないけれど、私はこの街の復興を思い、これからの人達に防災活動を通して、水の怖さも豊かさも同時に伝えていきたい。そして、あのコップ一杯の水を差し出せる人になりたい。

キラキラとした故郷の水の美しさ。水を守り、街を守っていくことがこれからの私のできることだと思う。